

編集後記

第16号から印刷物としてではなく、電子媒体として発行してきた。この第21号で6冊目となる。これまでと同様に名古屋大学附属図書館のレポジトリに登録されるとともに、技術教育学研究室（横山研究室）のHPに掲載される。研究室のHPには、室報全体をPDF化したものを掲載している。HPのアドレスは以下の通りである。

http://gi.jyutukyoi.kugaku.blogspot.com/p/blog-page_58.html

本号では前号に引き続き、科研費挑戦的研究（萌芽）「学校図面分析による戦前戦後の技能労働者教育に関する歴史的研究」の共同研究の成果を掲載した。山田論文がそれである。

今年の春以降はコロナ禍で海外への調査は不可能になった。昨年度までは毎年北欧には1、2回、ロシアや中国などにも時々出かけていた。私が北欧とロシアへたびたび渡航したのは、北欧のスロイド教育やロシア法に対する関心が一つの理由であった。同時にそれぞれの国の職業教育・訓練に対する関心ももう一つの理由であった。

このようにたびたび海外調査が実施できたことは、私が名古屋大学という研究環境に恵まれた大学に所属してきたことによる。また、以前の編集後記に書いたように、スウェーデンのリンショーピン大学のスロイド教員養成所に客員研究員として滞在したとき以来、築いてきた多くの人脈によって可能になった。今回の編集後記では、スベン・ハルトマンとの出会いのことを書き留めておきたい。私が彼と最初に会ったのは、1997年8月にリンショーピンで開催されたスロイド教育に関する研究会であった。そこには北欧のスロイド教育研究者が参加していた。ドイツ人のハンス・ラインケも参加していたが、その参加者の一人にリンショーピン大学教育学研究科のスベン・ハルトマンがいた。スベン・ハルトマンは数年後にストックホルム教育大学に教授として移動し、私が2003年8月から約一年間彼のもとで客員研究員として滞在することになる。彼は、ジョン・デューイの研究者であったが、スロイド教育にも関心を持っていた。スウェーデンのスロイド教育に関する研究で教育学の博士号を取得した研究者は、彼のところで取得した人がほとんどであったように思われる。実際に、私がリンショーピン大学に滞在していたときには、同大学のスロイド教員養成所の教員には博士号をもった教員はいなかった。当時、そこでスロイド教育学を担当していたカイサ・ボルユもヤン・フェーグレンもまだ博士学位は取得していなかった。

私がリンショーピン大学に滞在していたときにエバ・トロッチッヒがリンショーピン大学で教育学の博士学位を取得したが、彼女の学位論文の公開討論会に出席したことを覚えている。彼女とは、2003年に私がストックホルム大学で客員研究員になったときに、スベン・ハルトマンのゼミで再会することになった。このような研究者が執筆者となって、スベン・ハルトマンが編集した、『スロイドー教育的スロイドの歴史と現在』という本が2014年に発行された。この本の翻訳を可能性があれば出版したいと考えている。

（横山悦生）